

コロナ渦で見直される住まいとまち（その2）
アンケート調査による日韓台中の比較

森田 芳朗*¹ 山本 佳嗣*² 金 容善*³ 廖 硯岑*⁴

Impact of introducing remote working/learning on demand for housing and neighborhoods in Japan, Korea, Taiwan and China under COVID-19 pandemic

Yoshiro Morita*¹ Yoshihide Yamamoto*² Yongsun Kim*³ Chutsen Liao*⁴

This paper aims to clarify the impact of introducing remote working/learning on demand for housing and neighborhoods in Japan, Korea, Taiwan and China under COVID-19 pandemic. We conducted a questionnaire survey and clarified the similarities and differences among the countries due to the quality and condition of houses and lifestyle of the people.

1. 研究の目的と方法

前報に続き¹⁾、新型コロナウイルス感染症の影響下、テレワークや遠隔授業が暮らしにどう入り込み、住まいやまちの捉え方をどう変えているかをアンケート調査から探る。本報では、特に日本・韓国・台湾・中国といった国々の状況に注目する。

アンケート調査は、テレワークおよび遠隔授業の経験者を対象に、2020年7月から2021年1月にかけて google form および問巻網（中国のみ）を用いて行った。表1に回答者の居住国と属性（社会人／学生の別）、図1に月ごとの回答数を示す。回答者数を踏まえ、社会人のテレワークは日本・韓国・中国の三カ国、学生の遠隔授業は日本・韓国・台湾の三カ国の実態を分析する。

回答は、日本は感染の第2波を迎えた2020年8月、中国は翌9月、韓国は第3波に向かう2020年12月に集中した。台湾も韓国とほぼ同時期の回答が多いが、当時、台湾国内の感染者は極めて少ない状況だった（図2）。

表1. 回答者の居住国と属性（太字は三国間比較に用いるデータ）^{注1}

	日本	韓国	台湾	中国	その他	不明	合計
社会人	194	96	11	145	13	2	461
学 生	147	32	54	15	9	4	261

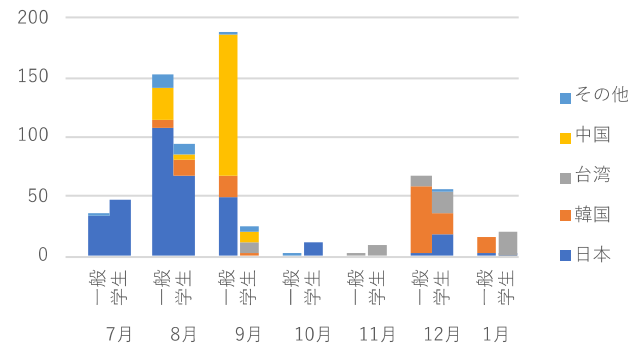


図1. 国・属性・月別の回答者数（2020年7月～2021年1月）

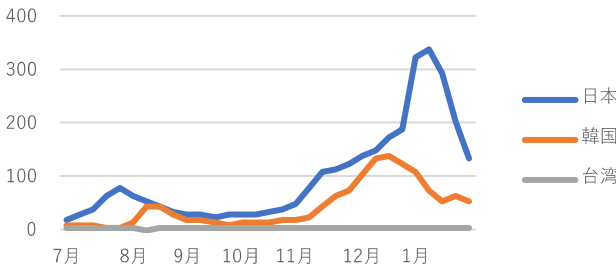


図2. 人口千人あたりの新規感染者数の推移^{注2}

2. 自宅でのテレワーク・遠隔授業の実施状況

まず、全勤務時間に占める在宅勤務（自宅でのテレワーク）の割合を尋ねたところ、図3の結果が得られた。いずれの国も5割以上との回答が2～3割ある一方、2割以下との回答も4～6割あり、頻度は様々である。

自宅のどこでテレワークを行うかは、三カ国とも「LD（リビングダイニング）」「寝室・個室」が多い。「書斎」の利用は、中国では1/3を超えるものの、日本では1割にとどまるなど、国による差が大きい（図4）。「書斎」でのテレワークは広い住宅ほど多く見られることから（図5）、日本では書斎を持てる規模の住宅に限られている状況がうかがえる。実際、三カ国のなかで日本の住宅は最も狭い（図6）。

図7には、学生が家のどこで遠隔授業を受けているかを示した。最も多いのは「書斎・寝室」である。

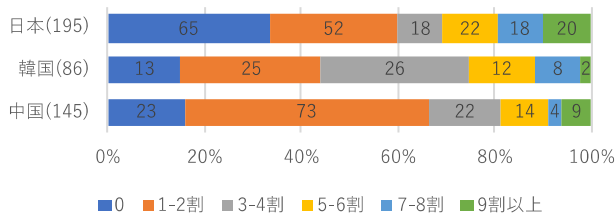


図3. テレワークの割合（社会人）^{注3}

*¹ 東京工芸大学 工学部 工学科 建築コース教授 *² 東京工芸大学 工学部 工学科 建築コース准教授
*³ 関西学院大学 建築学部 建築学科 *⁴ 国立台北科技大学 設計学部 建築学科
2022年3月25日受理

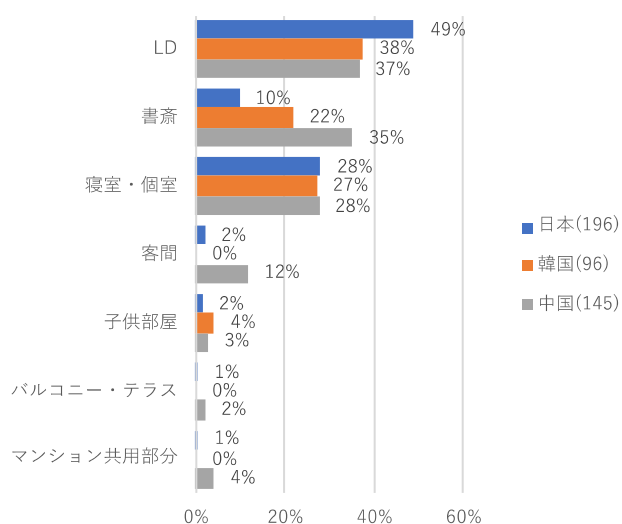


図4. テレワークを行う場所（社会人）

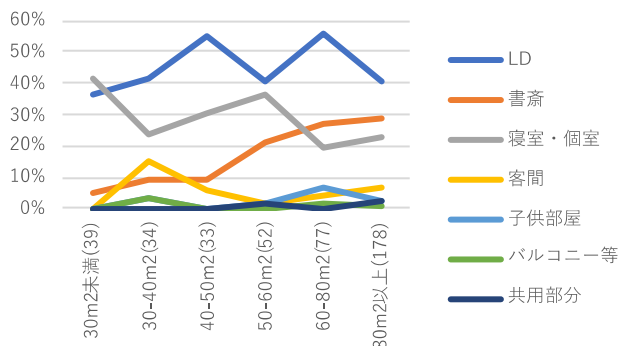


図5. 住宅の広さとテレワークを行う場所（社会人）注4

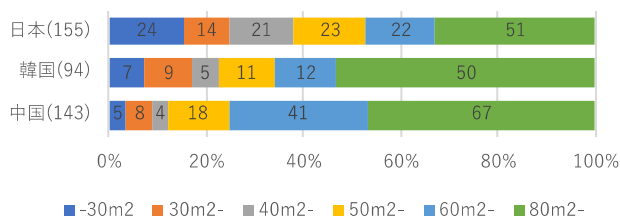


図6. 国別の住宅面積（社会人）

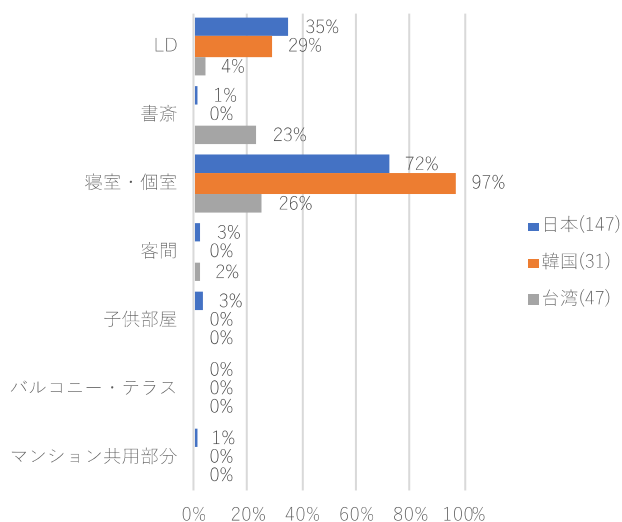


図7. 遠隔授業を受ける場所（学生）注5

3. 住まいの対応

次に、在宅勤務をきっかけに行った、またこれから行う予定の住まいの改造等を尋ねた（図8）。

各国とも主に「家具（家具の配置換え）」での対応がなされているが、日本以外の国々では「部屋用途（部屋同士の機能の入れ替え）」も多い。これは、先に見た住宅の広さとも関係しているものと考えられる。つまり、部屋数の少ない日本の住宅では、部屋の用途替えが可能なケースは限られている。

実際、住宅の広さとすでに行った住まいの対応の関係を見てみると、「部屋用途（部屋同士の機能の入れ替え）」が多く行われるようになるのは、「80㎡以上」の広い住宅である（図9）。また、この広さになると「仕切り（パーティションの設置）」などの工夫が不要になってくる状況も見える。

学生にも同様に、遠隔授業をきっかけに行った住まいの改造等を尋ねた（図10）。社会人とくらべると対応は限定的だが、限られた空間のなか「家具（家具の配置換え）」などの工夫で乗り切っている学生の苦労を察することができる。

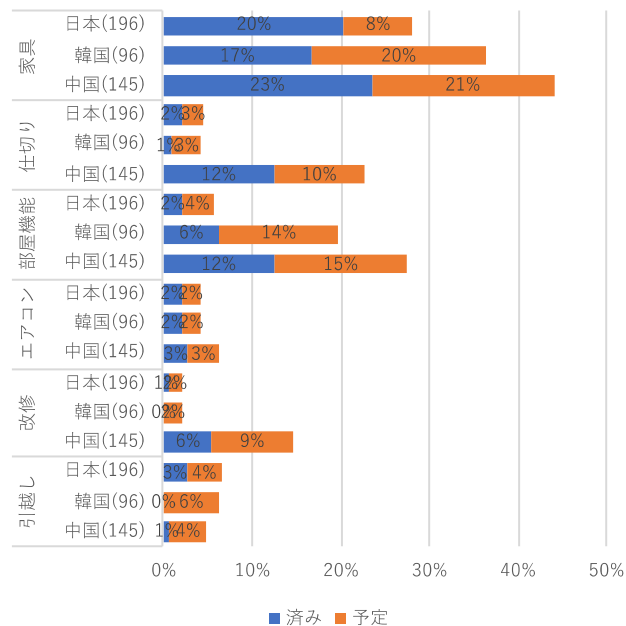


図8. 住まいの対応（社会人）

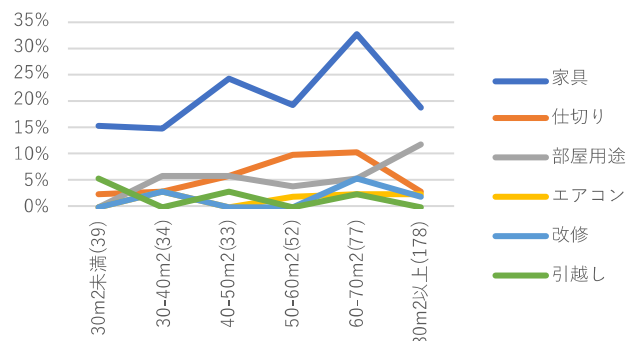


図9. 住宅の広さと実施した住まいの対応（社会人）

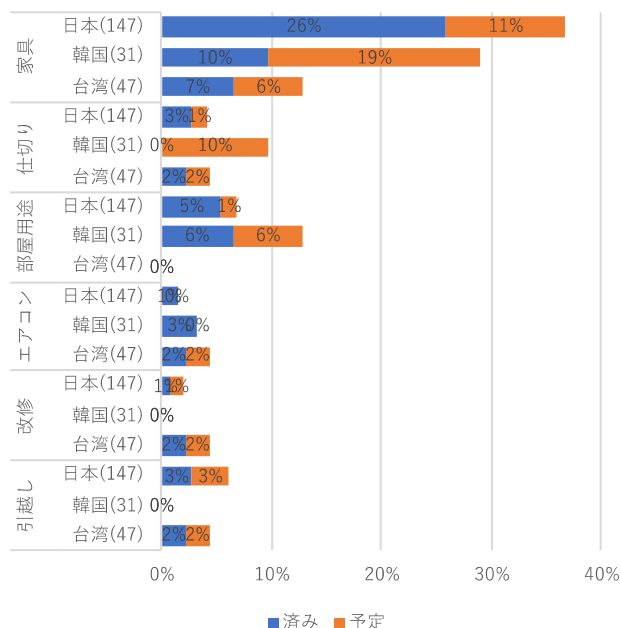


図 10. 住まいの対応 (学生)

4. 住まいに求めるようになったもの

図 11 は、自宅でのテレワークを経験して、これまで以上に住まいに求めるようになったものを社会人に尋ねた結果である。「独立性 (部屋の独立性)」が最も多く、「遮音性 (建物の遮音性)」が続く点は三カ国とも共通しているが、韓国では「断熱性 (建物の断熱性)」への不満がほとんど見られないなど、各国の建物性能の違いが在宅勤務のストレスに与える影響もうかがえる。

図 12 には、遠隔授業を踏まえて学生が住まいにより求めるようになったものを示した。傾向は社会人と近いが、「遮音性 (建物の遮音性)」への学生の要求はより高い。

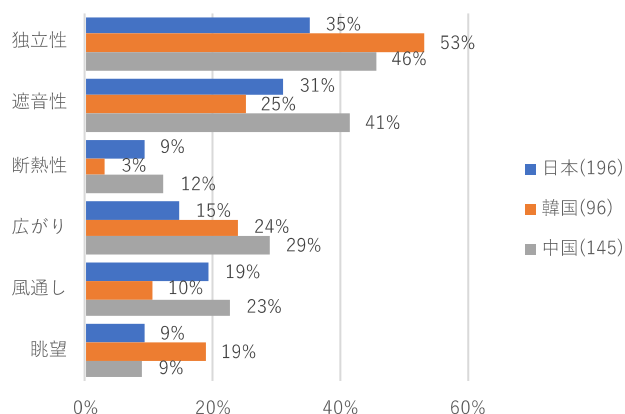


図 11. 住まいに求めるようになったもの (社会人)

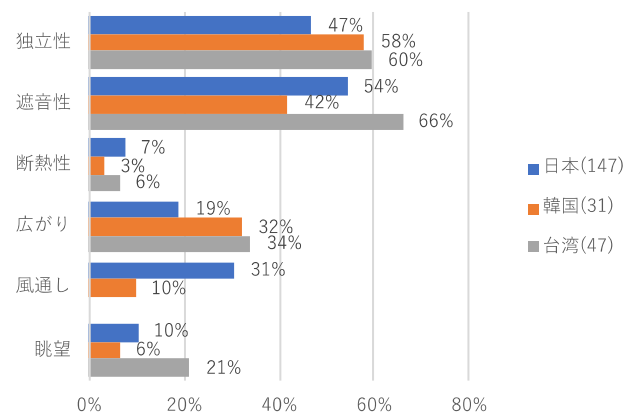


図 12. 住まいに求めるようになったもの (学生) 注6

5. 自宅外でのテレワーク・遠隔授業の実施状況

テレワークを行う際に、自宅以外の場所を選ぶこともある。その実態を探るため、全勤務時間のうち、自宅外でテレワークを行う割合を尋ねた (図 13)。自宅外でのテレワークは、2/3 が行くと回答した中国が最も多く、2 割にとどまる日本との差は大きい。その場所として、中国では「カフェ」「サテライトオフィス」「自分のワークスペース」「コワーキングスペース」などが挙げられている (図 14)。

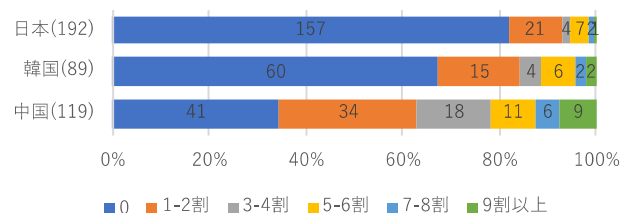


図 13. 自宅外でのテレワークの割合 (社会人)

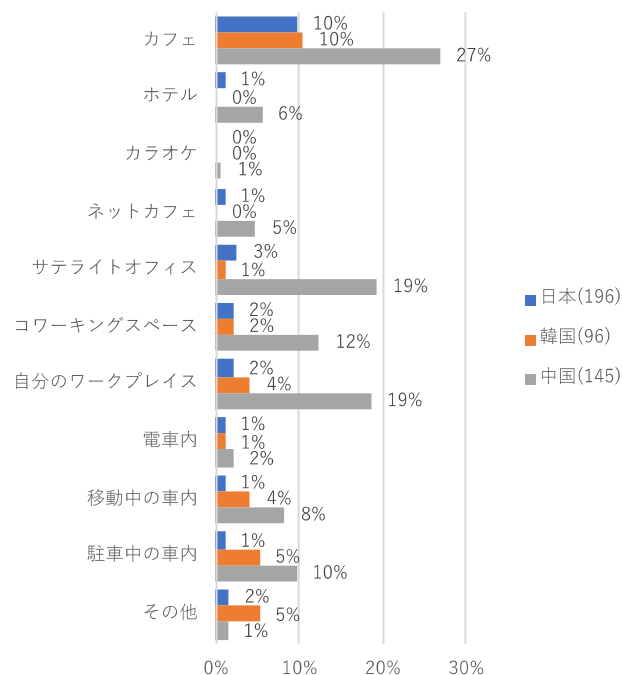


図 14. 自宅外でテレワークを行う場所 (社会人)

学生にも、全授業時間のうち自宅外で遠隔授業を受ける割合を尋ねた。日本や台湾でも約半数の学生が自宅に縛られないかたちで遠隔授業を受けているが、韓国ではその割合が8割以上と高い（図15）。

遠隔授業を受ける自宅外の場所は「カフェ」が最も多い（図16）。また、設問者が予想しなかった「その他」の回答もすべての国で1割ほどあった。自由記述による具体例としては、韓国・台湾は「大学」「研究室」「図書館」、日本は「友人の家」「彼氏／彼女の家」が多く挙がった。

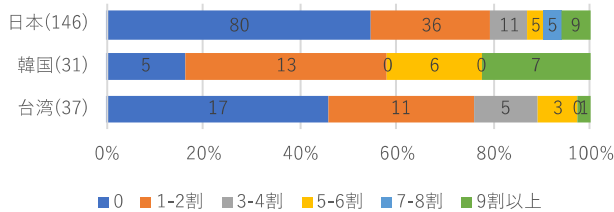


図15. 自宅外での遠隔授業の割合（学生）

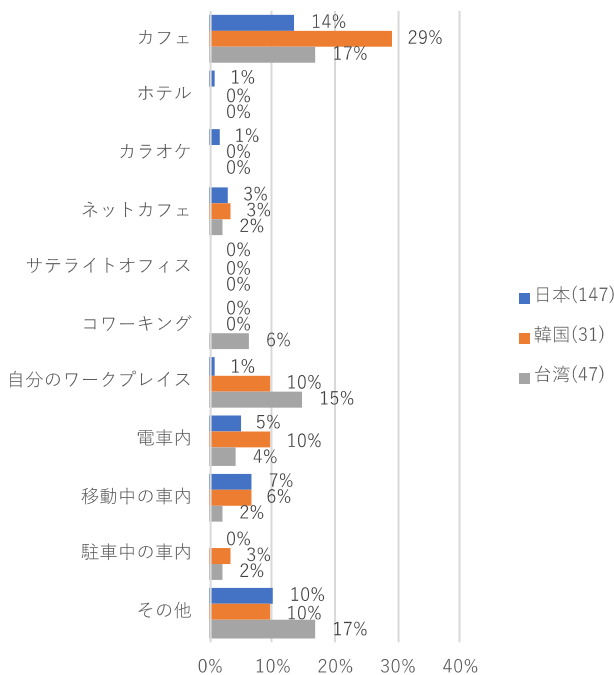


図16. 自宅外で遠隔授業を受ける場所（学生）

6. まちに求めるようになったもの

前述の「住まいに求めるようになったもの」とは対照的に、テレワークや遠隔授業を経て「まちに求めるようになったもの」は国による差が大きい。なかでも中国や台湾の多くの項目での数値の高さは特徴的である（図17、18）。

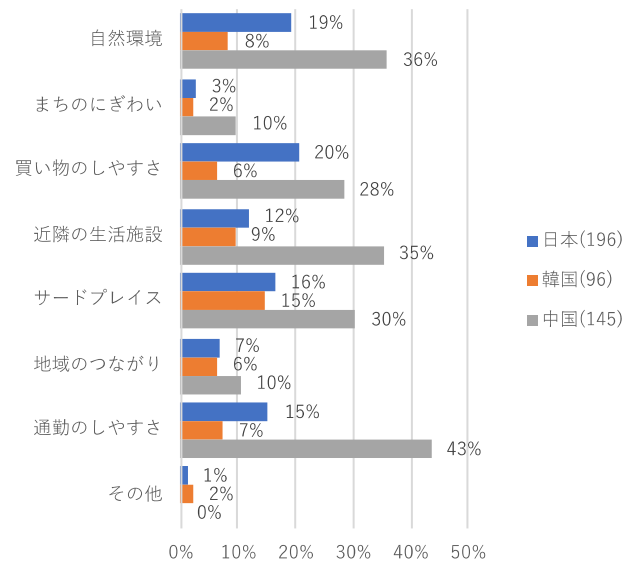


図17. まちに求めるようになったもの（社会人）

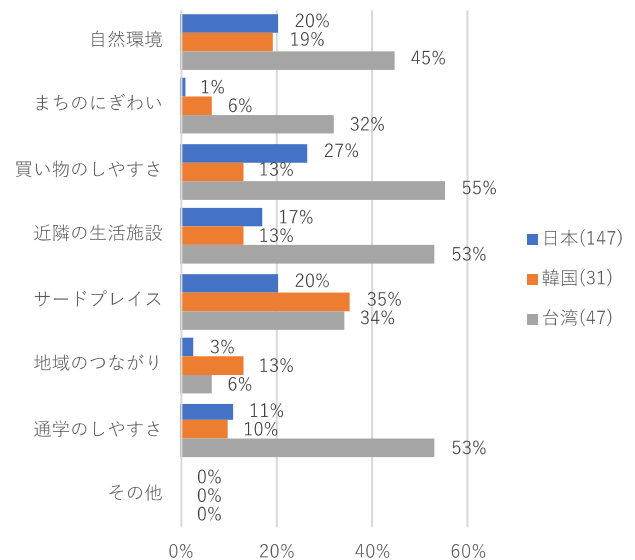


図18. まちに求めるようになったもの（学生）

7. まとめ

以上、本報では、日本・韓国・台湾・中国の社会人・学生へのwebアンケートの結果から、コロナ下における自宅および自宅外でのテレワーク・遠隔授業の実施状況、それに伴う住まいやまちへの要求の変化を把握した。自宅でテレワークや遠隔授業を行う場所は、いずれの国もリビングダイニングや寝室・個室が多いが、各国の住宅事情に応じて書斎などが利用されるケースもある。

在宅勤務・遠隔授業への住まいの対応は、家具の配置換えによるものが中心である。また、住宅面積に余裕がある国ほど、部屋の用途替えも見られるようになる。

自宅でのテレワークや遠隔授業を経て、部屋の独立性や建物の遮音性がより求められるようになったのは各国共通だが、住まいを取り巻くまちへの要求の変化は中国や台湾で著しい。これは外食率の高さなど、これらの国におけ

る生活のまちとのつながりの深さの現れとも考えられるが、今後の研究テーマとしたい。

謝辞

アンケートに回答してくださった皆様、調査を一緒に行った潮崎しずくさん、申東賢さん、田中星也さん、崔瑜京さん（いずれも当時東京工芸大学工学部建築学科 4 年生）に深く感謝申し上げます。

注釈

- 1) 「その他」は、アメリカ (7)、カザフスタン (6)、イギリス (2)、インドネシア (1)、オーストラリア (1)、オランダ (1)、ジョージア (1)、ドイツ (1)、ノルウェー (1)、フィリピン (1) である。
- 2) 参考文献 2～4 をもとに作成した。
- 3) 「0」という回答は、テレワークを経験したものの回答時点では行っていないものである。
- 4) 「その他」の国も含めた全回答をもとに作成した。
- 5) 台湾はこの時期まで遠隔授業はほとんど行われていなかった。
- 6) 台湾は「風通し」の選択肢を設けていなかった。

参考文献

- 1) 森田芳朗、山本佳嗣、金容善、廖硃岑、コロナ渦で見直される住まいとまち：テレワーク・遠隔授業への対応に関するアンケート調査から、東京工芸大学工学部紀要、Vol.44、No.1、pp.36-39、2021 年
- 2) 厚生労働省、データからわかる-新型コロナウイルス感染症情報-、<https://covid19.mhlw.go.jp/> (参照日：2021/09/20)
- 3) 韓国保健福祉省、Coronavirus Disease-19, Republic of Korea、<http://ncov.mohw.go.kr/> (参照日：2021/09/20)
- 4) Taiwan Centers for Disease Control、<https://www.cdc.gov.tw/> (参照日：2021/09/20)